



武蔵村山市立第一小学校

学校だより

令和5年9月1日



子供向けの言葉で

校長 押本 純樹

先日も新聞に教員不足の記事が載っていました。働き手不足は、教員に限った社会問題ではありませんが、確かに志望者は減少しています。その理由としては、仕事内容が煩雑で多忙感がぬぐえないイメージがあります。私が教員になったばかりと比べると、やるべきことが多様化し、仕事量も増えた気がします。放課後になれば、帰宅を促すチャイムが鳴るまで校庭で子どもたちと遊んでいた頃が懐かしくもあり、振り返ると毎日の授業をどうしていたのか不思議に思うところもあります。

時代の要請には抗えないところがあり、あれもこれも受け入れてきた学校は、ようやく「教員の働き方改革」という言葉を耳にするようになり、少しずつ見直しが図られてきています。校長としても裁量内で先生たちが疲労感なく、気持ちよく子供たちのために働き続けられるようにするには、どうしたら良いのか考えていて、通知表の在り方もその一つです。作成するには労力が要り、その教育効果の程が気になるところですが、学期ごとに評価し、子供たちの頑張りを保護者に伝えることは、教師として責任をもって取り組まなければならないと思っています。

しかし、その通知表も教員業務の負担軽減から形を変えつつあります。一番は子供一人一人に書く所見文の扱いです。本校でも1学期は個人面談をもって所見文なしとしていますが、最近では通知表発行を年1回にする、所見文を一切なくして個人面談にするといった学校もあるようです。それを聞いて、もう一步管理職として何かできないかと悩み始め、副校長とも相談し、年度途中ではありますが、3学期の通知表所見文を次のようにします。2学期は従来どおりで変更はありません。

3学期は、期間が短く、行事も少なく、教員側としては、成長や頑張りを見取る難しさがありません。そこで、範囲を広げ、締めくくりに年間を通して、担任が見届けた成長や頑張りや子供向けの言葉で通知表に記載します。

この変更を先生たちに提案したとき、反対意見はありませんでした。「それはいいですね。」と前向きに捉える声がありました。もちろん保護者の方も担任がお子様になんと言葉を記載したのか、必ずお読みいただき、成長を共有してください。

本来教員は子供たちと関わるのが楽しくて先生になつたはずですが、その関わりに周囲はあまり負担をかけないようにすることが大切ではないでしょうか。かえって仕事を増やしてしまったかという心配もありますが、まずは見通しをもって取り組んでいきます。実際に文章という形になるのは年度末ですが、御理解、御協力をお願いいたします。



秋には秋の花を咲かせましょう。